

2017（平成29）年度
年次報告書

一般財団法人日本青年館

I . 公益活動

1 . 青年活動振興事業

1) 第66回全国青年大会の開催（11月10日～13日 日本青年館他）

全国青年大会は、講和条約発効を記念して1952（昭和27）年に第1回大会が開催され、以来、勤労青年のスポーツ・文化活動の発表と技能向上の場として、全国の青年団が中心となって毎年東京で開催しています。この大会は、一部の種目を除き国民体育大会や国際競技会などに出場した経験のある選手には参加資格がなく、地域で地道にスポーツや文化活動に携わっている青年が参加するものです。地域のスポーツ、文化活動の裾野を広げ、より多くの青年たちに活躍の場を提供するとともに、全国から集まった青年たちの交流と友好を深めることにも重点を置くことにより、平和で文化的な住みよい地域を創っていくことを目的にしています。

第66回大会の参加者数は交流種目を含めて34都道府県から1,942名。開会式は日本青年館ホールで開催し、瑤子女王殿下のご来臨とともに、オープニングムービーの上映や昨年度郷土芸能の部で最優秀賞を受賞した和歌山県西岩代伝統芸能保存会による「西岩代の獅子舞」の記念祝舞など、舞台の魅力を存分に発揮する演出に努めました。また、瑤子女王殿下のお言葉には、同世代の若者たちへの素直な想いと暖かいエールがこめられ、参加者に深い感動を与えました。

種目の競技においては、地元を代表して出場している選手たちらしく、日本青年館ホールをはじめ東京体育館や講道館、大田スタジアムなどで熱戦・熱演が繰り広げられました。なお、民俗芸能の形を変えることなく若者の力で継承している団体に贈られる後藤文夫賞は、宮城県牡鹿郡女川町の「女川町江島法印神楽」が受賞しました。

今年度の全国青年大会実施種目は以下の通りです。

<体育の部>

バレーボール、バスケットボール、バドミントン、軟式野球、卓球、柔道、剣道、ボウリング、フットサル

<芸能文化の部>

合唱、郷土芸能、写真展、生活文化展、将棋、意見発表、のどじまん、舞台発表

<交流プログラム>

全国青年団物産市、全国青年団ダーツ大会、全国青年団百人一首大会

2) 第62回全国青年問題研究集会の開催（2018(平成30)年3月2日～4日 日本青年館）

「青年問題研究集会」（青研集会）は、1950年代に日本青年団協議会が創造した、働く青年の生活課題の解決をめざす学習・実践活動を集約する集会です。1954（昭和29）年に、勤労青年の教育のあり方、考え方として「勤労青年教育基本要綱」を策定した日青協は、青年の自主的学習活動として「共同学習」運動を全国に呼びかけました。共同学習運動は、仲間づくりと話し合い学習を重視し、活動や生活の身近な問題を語り合う中から共通の課題を見出し、共同の力によって課題解決の実践に取り組んでいくという、青年の主体性、自主性による実践的学習運動です。このような共同学習運動の全国的集約と発展的展開をめざす場として、日青協は1955（昭和30）年から「全国青年問題研究集会」（全国青研集会）を開催しています。青研集会は、青年個人や青年組織を巡る問題を、取り組んだ実践活動に基づいてレポート化し、テーマごとに分科

会を設定して議論します。今日では地域課題の解決のほか、仕事や家庭、恋愛・結婚等、個々が置かれる生活実態、苦悩や不安等生きづらさや息苦しさを綴るレポートも寄せられ、今日的な青年問題が浮き彫りとなっています。こうした課題に対し、助言者の力も借りつつ参加者全体の集団討議を通じて問題の所在や社会的背景を明らかにし、再び地域で実践することで課題解決に努めることをめざしています。

今年度は、「共感・共有・共同」をテーマに日本青年館で開催し、17道府県から57名が参加しました。実践報告では、熊本大学の山城千秋教授がコーディネーターをつとめ、3団体から発表いただきました。2日目の講演では、民俗研究家の結城登美雄氏を迎え「今あらためて考える。地域とは何か」をテーマに、地域を大切に活動する若者たちにエールが送られました。今年度のレポートは仲間づくりや青年団組織、リーダーのあり方、仕事・家庭・恋愛・結婚と青年団活動など、日頃団員が抱えている悩みや課題に関する内容が大半を占めました。

3) Rebornこころのふるさとフォーラム2018の開催

(2018(平成30)年3月3日～4日 日本青年館)

若者の地域活動や成長を支える人たち(支援者)同士をつなぎ、個々の課題と向き合い、全体で共有し解決に向けた実践と検証を繰り返す場を作り出すため、「Rebornこころのふるさとフォーラム」を開催しました。この事業は市民団体、社会教育・青少年教育に携わる市民団体(公益社団法人全日本郷土芸能協会、自治体問題研究所、全国水源の里連絡協議会、特定非営利活動法人地球緑化センター、日本都市青年会議、認定特定非営利活動法人JUON(樹恩)NETWORK)と日青協とで実行委員会を編成し企画運営しました。

参加者数は実行委員を含めて23都道府県64名。教育委員会担当者や大学教授、会社員、一般市民など地域づくり、若者の活動支援などに関心のある幅広い層から参加がありました。プログラムは講演、シンポジウム、分科会で、一部のプログラムは先述の第63回全国青年問題研究集会と合同で開催しました。分科会では高齢者の孤独死防止や、不審者の防犯などの活動を行っている地域見守り隊の報告や、福井県から職員という立場で考える社会教育施設のあり方や青年教育の取り組みの実践などの報告がありました。

4) 全国地域青年「実践大賞」

「全国地域青年『実践大賞』」は、全国の優れた青年活動の取り組みに学びあい、それを顕彰するもので、全国の青年団や教育委員会などを通じて応募を呼びかけています。今年度は若者による地域実践を対象とする「地域活動の部」と、昨年度までの全国青年団教宣コンテストを再編し、チラシや新聞、グッズ、映像などの広報宣伝活動を対象とする「教宣活動の部」(教宣とは教育宣伝の略)を新設し実施しました。この結果、15道県から地域活動の部に25本、教宣活動の部37本(機関紙5本、グッズ21本、映像3本、ウェブサイト1本)合計62本の実践の応募がありました。審査員ならびに受賞結果は以下の通りです。

◇審査員 萩原建次郎 氏(駒澤大学教授)
矢口 悦子 氏(東洋大学教授)
赤坂 渡 氏(東京新聞 中日新聞 東京中日スポーツ 局次長)
三友 千春 氏(元日本青年団協議会副会長)
桐山 理恵 氏(デザイナー)
澁谷 隆 氏(一般財団法人 日本青年館 公益事業部次長)

<地域活動の部>

■実践大賞

集められた実践の中で最も優れた実践に取り組んだ団体に授与されます。

受賞団体

- ・高知県青年団協議会（高知県）

「高知県青年団協議会50周年記念セレモニー 航一トモニ・コレカラモー」

実践概要

2017年度で高知県青年団協議会は50周年を迎えました。その50周年を記念して、高知発・青年団発のアイドルグループ「高知家応援団はちきんベイビーズ」のデビューを企画し、県内各地の青年団と教育委員会訪問、よさこい鳴子踊りへの出場などをはじめ、12月2日には「高知県青年団協議会50周年記念セレモニー航一トモニ・コレカラモー」を実施。高知県の尾崎知事、青年団OB・OGの方々、現役の青年団の皆さま、大学生と共に、50年の節目を祝う事業を実施しました。

■準実践大賞

実践大賞に次いで優れた実践に取り組んだ団体に授与されます。

受賞団体

- ・本郷地区青年団（石川県輪島市）

「『文化交流大会』～本郷地区青年団(石川)と南風原町青年団連合(沖縄)の取組み～」

- ・沖縄県南風原町青年連合会（沖縄県島尻郡南風原町）

「石川県二又川青年団内保青年団との文化交流大会 『伝統芸能が紡ぐ若者の力』」

実践概要

2016年度に行った第62回全国青年問題研究集会で同じ分科会だったことを機に生まれた石川県と沖縄県の共同事業です。石川の本郷地区と沖縄の南風原町の二つの伝統文化を比較し、事業を協同ですすめていくことで、互いの地域の活性化を図るあらたな視点と事業を作り出していくことを目的として行われました。地元の伝統芸能の良さを新ためて知り、青年団や地域の若者に伝えていくことでお互いの地域活性化に繋げ、発展に繋げていく取り組みです。

■実践奨励賞

長期間にわたり続けてきた活動を行っている実践や、新たな実践に取り組んだ団体などに授与されます。

受賞団体

- ・福井県連合青年団（福井県）

「ムラロゲイニング」

実践概要

ムラロゲイニングとは緩やかな競技性を持たせた村歩きのこと、チームに分かれてマップを元にチェックポイントを回りながら、様々な問題にチャレンジします。イベントを通じて地元を学ぶ・知る機会にもつながっています。

- ・大山町青年団（鳥取県西伯郡大山町）

「名和神社 年越しもちつき」

実践概要

1月31日に地元の名和神社を訪れる参拝客におもりを配る取り組みです。この活動は元々交通遺児への募金活動として取り組まれていたが、青年団が休止となり途絶えていました。それを20年前に復活させて今日まで活動しています。

- ・小豆島町青年団（香川県小豆郡小豆島町）

「15年間、地域と共に紡いできたこと ～歩行車寄贈に至るまで～」

実践概要

青年団だけでなく、地域の方々を巻き込み15年間にわたりプルタブや空き缶の回収活動を行い、介護保険施設に歩行車を寄贈した取り組みです。

■支援実践賞

青年団体発足を支えた実践や、若者のための施設における実践など、青年活動の支援に取り組んだ団体に授与されます。

受賞団体

- ・静岡市青年の船（静岡県静岡市）

「静岡市青年の船再出港に向けて」

実践概要

静岡市青年の船は旧清水市の時代から40年続く大切な事業でしたが2015年度役員不足という理由で休止に陥りました。しかし学区の団員の声などを反映し、仲間づくり、地域への帰属意識、仲間への愛着心の醸成の目的を達成するために青年の船事業を復活させた取り組みです。

■教宣大賞

集められた実践の中で最も優れた教宣活動に取り組んだ団体に授与されます。

受賞団体

- ・CREW R, S 竜王町青年団（滋賀県蒲生郡竜王町）

「CREW R, S 竜王町青年団機関紙『若人』」

実践概要

竜王町青年団の発足と同時に発行された機関紙「若人」。町内の方に青年団活動や事業内容を知ってもらったり、興味を持ったりしてもらえるように手書きにこだわって作成しています。

■準教宣大賞

教宣大賞に次いで優れた実践に取り組んだ団体に授与されます。

受賞団体

- ・犀川校下青年団（石川県金沢市）

「犀川青年団PRムービー」

実践概要

地区の成人式で流す、青年団PR映像です。

■教宣奨励賞

長期間にわたり続けてきた教宣活動を行っている実践や、新たに教宣活動に取り組んだ団体などに授与されます。

受賞団体

- ・今津町青年団（滋賀県高島市）
「今青親子肝試し スタッフTシャツ」

実践概要

町内の小学生を対象にした肝試しイベントでスタッフが着るTシャツです。デザインも今津という文字に変化をつけ、お化け屋敷っぽいデザインにしました。

- ・球磨郡青年団協議会（熊本県球磨郡）
「球磨郡でがまだす“若者”の今を伝える情報誌」

実践概要

青年団と地域をつなぐ機関誌です。一年間の取り組みだけでなく、各地の団員を紹介されています。全ページカラーで作られており、とても見やすく仲間の顔が見える機関誌です。

- ・豊後大野市青年団なないろベース（大分県豊後大野市）
「ブログ『いっちきち！やっちきち！豊後大野』」

実践概要

青年団設立準備委員会時代からブログを開始し8年目となります。青年団活動だけでなく、活動フィールドである豊後大野市のことも紹介するなど、投稿内容の幅広く掲載されています。

■田澤義鋪賞

田澤義鋪（1885（明治18）年～1944（昭和19）年。日本青年館第5代理事長）は25歳で静岡県安倍郡長（現在の静岡県知事）、青年団にかかわります。その後内務省明治神宮造営局総務課長を務め、明治神宮の造営にあたり青年団の労力奉仕（ボランティア）を建議しました。こうした田澤義鋪氏の実績に基づき、明正選挙運動、地方自治の発展や地域振興活動に取り組み、優れた成果を収めた団体に一般財団法人日本青年館から贈られます。

受賞団体

- ・高知県青年団協議会（高知県）
「DVD『糸吉プロジェクト2017』」

実践概要

2017年度高知県団が取り組んだ事業をDVDにまとめたものです。青年団だけでなく、参加者や地域の方々などが多数紹介されています。

■全国青年団OB会奨励賞

全国の青年団にとって励みとなるような組織強化拡大に顕著な実績を上げた団体に、全国青年団OB会より贈られます。

受賞団体

- ・刈谷市小垣江青年団（愛知県刈谷市）
「中学生・高校生と青年団のつながり作り」

実践概要

中学生、高校生に盆踊り準備を通じて青年団とともに活動してもらうことで、青年団および地域行事への興味を持ってもらい、高校卒業後の青年団への入団につなげ、

団員増加により青年団が活性化した取り組みです。

■後藤文夫賞

後藤文夫（1884(明治17)年～1980(昭和55)年）は、日本青年館理事長を二度（1930(昭和5)年～1934(昭和9)年、1956(昭和31)年～1969(昭和44)年）にわたり務め、開館当時より民俗芸能の発掘や発展に尽力してきました。その功績を偲び、1991(平成3)年度より「全国青年大会郷土芸能部門」に後藤文夫賞を創設し、民俗芸能の形を変えずに若者の力で継承している団体にこの賞が贈られます。

受賞団体・受賞実践

・女川町江島法印神楽保存会（宮城県牡鹿郡女川町）「女川町江島法印神楽」

5) 第48回北方領土復帰促進婦人・青年交流集会の開催（9月16日～18日 根室市）

日青協は1966(昭和41)年より北方領土返還要求運動に取り組み、1970(昭和45)年より婦人会の全国組織である全国地域婦人団体連絡協議会とともに、北方領土を望む納沙布岬での視察、北方領土問題の学習、元島民の返還への思いを聞くなどの内容で、北方領土復帰促進婦人・青年交流集会を開催してきました。近年では2月7日「北方領土の日」にあわせ、内閣府、青年、労働、婦人、地方6団体等、官・民で編成された実行委員会が主催する「北方領土返還要求全国大会」の実行委員長を務めています。

本集会には80名が参加。この集会で得た学びを共有しながら、なぜ北方領土問題の解決が必要なのか、そのために私たちができることは何なのかを議論しました。

6) 国際交流事業

(1) 中華全国青年連合会及び韓国青少年団体協議会の代表団招聘について（8月1日）

日青協は1956（昭和31）年より中華全国青年連合会（全青連）と交流を行っています。また、韓国青少年団体協議会（韓青協）との交流は、2012（平成24）年に（社）中央青少年団体連絡協議会（中青連）の解散を受け、任意団体としての中青連事務局機能の役割を担う日青協が、中青連事業だった韓青協との交流事業を、2015（平成27）年からは日青協事業としてこれを承継し実施しています。これら交流の実績に基づき、8月1日に行われた日本青年館竣工記念式典にあわせ招聘しました。全青連からは伍偉（ゴ・イ）副秘書長を団長とする代表団5名が、韓青協から徐相箕（ソ・サンギ）会長を団長とする代表団2名が来日し、各地の青年と交流しました。

(2) アジア未来サミットの開催（8月2日）

日本青年館の開館を記念し、「アジア未来サミット」を開催しました。当日は現役青年団員やOB・OG、在日中国人、留学生など参加者160名が参加。第一部は記念講演として、伊藤忠商事（株）前会長や元駐中国大使を歴任され、アジア情勢をはじめ政財界に精通した丹羽宇一郎氏を迎え講演いただきました。また第二部ではシンポジウムとして、日青協をはじめ全青連、韓青協、在日本朝鮮青年同盟（朝青同）の各青年団体代表による意見交換を行いました。

(3) 第26次日青協植林訪中団（9月6日～9月10日／河北省灤平（ランヘイ）県）

佐久間副会長を団長、高嶋局員を秘書長とする団員9名で構成された日青協第26次植林訪中団を派遣しました。今年度は初めて植林活動を実施する土地で、急斜面が多い山岳地帯に350本のアブラマツを植樹しました。現地の小中学生とともに植林活動を行い、植林後は現地青年と意見交換を行いました。

参加者は次の通りです。

団 長：佐久間祥平（日本青年団協議会副会長）
顧 問：久保田満宏（日本青年団協議会顧問）
秘書長：高嶋 聡平（日本青年団協議会事務局）
団 員：片桐 充弘（岐阜県青年団協議会元会長）
団 員：濱野 徹郎（三重県青年団協議会元会長）
団 員：福田 淳（日本青年団協議会元事務局）
団 員：福田 二胡
団 員：星 恵美子（第1回植林訪中団参加者）
技術者：西野 文貴（東京農業大学森林総合科学科特別研究員）

（４）日中国交正常化45周年記念フォーラムへの出席（11月15日～17日）

北京市内にある中日青年交流センターで開催された、中華全国青年連合会主催の日中国交正常化45周年記念フォーラムに、日青協を代表して照屋会長が参加し、これまでの交流の歴史や取り組みと成果、今後の展望について報告しました。そのほかの出席者は次の通りです。

団 長：照屋 仁士（日本青年団協議会会長）
顧 問：久保田満宏（日本青年団協議会顧問）
秘書長：棚田 一論（日本青年団協議会事務局）

（５）日韓青少年指導者交流事業（派遣）の開催（11月27日～30日 韓国ソウル、コヤン）

韓国ソウル、コヤンで開催された、日韓青少年指導者交流事業に参加者を派遣し、現地青年との懇談や、文化交流を行いました。参加者は次の通りです。

団 長：砂口 真（日本青年団協議会常任理事）
団 員：氏家 秀徳（日本青年団協議会事務局）
団 員：高田 裕之（公益財団法人国際青少年研修協会 事務局長）

7）東日本大震災で被災した仲間の想いを風化させないための取り組み

2011(平成23)年3月11日に発生した東日本大震災から7年の歳月を経ました。今でも多くの人たちが、ふるさとを離れ避難生活を余儀なくされています。震災の被災地である岩手、宮城、福島の青年団の中には、震災の犠牲となった仲間や大きな被害を受けた仲間も決して少なくありません。日青協は震災直後より生活物資の支援やボランティアの派遣、募金活動など被災地に向けた取り組みを全国的に展開し、復興支援と震災の記憶を継承していくことに努めてきました。こうした中、2016(平成28)年4月には、震度7を観測した熊本地震も発生しました。日青協では、被災した若者たちの暮らしの実態を綴る取り組みを進め、「生きる～東日本大震災と地域青年たちの記録～」を刊行、被災した青年たちの手記や体験記を綴り、東日本大震災の被害の実相を伝えるとともに、仲間の思いから学び、継承しています。「生きる」はこれまで5号刊行し、現在は多くの人たちに、被災の実相を風化させてはならないとの思いから、Web上で閲覧できるようにしました。

また、継承するもう一つの取り組みとして、「東日本大震災パネル」を製作し、パネル展の開催を呼びかけてきました。これまでに3部計22枚を作成し、地域の青年団員が諸事業の際にパネル展を開催して震災について仲間と語り合うとともに、地域からの防災・減災活動の一助として活用されています。

8）青年団平和集会 in 長崎の開催（12月9日～10日）

戦後青年団は、戦争に荷担した歴史の反省の立ち、平和な地域社会の実現に向けて努力しています。そうした取り組みの一つとして、日青協では平和集会を開催しています。

今年度は、アジア太平洋戦争の開戦のきっかけとなった暗号を発信したとされる塔の実物や魚雷発射試験場跡などを訪問したほか、戦争体験者の方からの講演や、グループディスカッションを行いました。

2. 第66回全国民俗芸能大会（11月25日 日本青年館ホール）

全国各地に伝えられる民俗芸能は、各地の風土と生活の中で生まれ、地域の人々によって歴史的に育まれてきたものです。それらは国民の生活の推移を物語る貴重な民俗文化財でもあります。この大会は、このような各地の貴重な民俗芸能を舞台上で公開し、民俗芸能の重要性を多くの人々に認識してもらおうと開催してきました。



歴史をひもとくと、日本で初めて地域の芸能を舞台上で紹介したのが初代日

本青年館のこけら落としとして開催された「郷土舞踊と民謡の会」で、1925(大正14)年のことでした。戦後この流れを継承してきた当事業は、通算すると76回目となります。これまでに440あまりの芸能を紹介してきました。出演者にとっては大会出場が大きな自信につながり、これを契機に芸能の保存の機運も高まり大きな成果をあげています。また、早くからこうした芸能の記録保存に取り組んできたのも当大会でした。

今年度の第66回全国民俗芸能大会は、11月25日に日本青年館ホールで開催しました（共催：全国民俗芸能保存振興市町村連盟）。出演芸能は以下の通りです。

- ・ 宇久須の人形三番叟（静岡県西伊豆町）
- ・ 三輪崎の獅子舞と鯨踊り（和歌山県新宮市）
- ・ 吹浦田楽（山形県遊佐町）
- ・ 川名津神楽（愛媛県八幡浜市）

いずれも青年が中心となって継承されている芸能であり、三代目日本青年館竣工への祝意が込められた見応えのある上演となりました。また、2年ぶりに研究公演を実施し、川名津神楽を対象に映像を活用しながら地域との関わりや芸能の全体的な紹介をしていただきました。今大会では企画委員会での意見によりチラシに大会の英語表記やフェイスブックでの大会ページ開設などの工夫を重ね、来場者数は700名を超えました。

また、大会の開催に合わせて雑誌「民俗芸能」第97号を発刊しました。

<企画委員>

- ・ 山路 興造 民俗芸能学会理事
- ・ 西角井 正大 前実践女子大学大学院教授
- ・ 吉川 周平 京都市立芸術大学名誉教授

- ・星野 紘 元文化庁伝統文化課主任調査官
- ・齊籐 裕嗣 前文化庁伝統文化財課主任調査官
- ・吉田 純子 文化庁伝統文化課文化財調査官
- ・俵木 悟 成城大学文芸学部准教授
- ・神田 竜浩 国立文楽劇場 文楽劇部企画制作課企画制作係長
- ・久保田 裕道 東京文化財研究所無形民俗文化財研究室長

昨年度の第 65 回大会に出場した「西之本国寺盆踊り」（鹿児島県南種子町）が国の文化審答申で「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」に選択され、2019 年度より記録調査事業が開始される予定となっています。全国民俗芸能大会出場に関する事前調査が契機となつてのことで、本大会が優れた芸能の保存にその役割を果たしていることが改めて明らかとなりました。

3. 月刊誌「社会教育」の発行

月刊誌「社会教育」は、今年度も毎月、計12回発行しました。社会教育を多様な角度から幅広くとらえ、行政、施設職員、さらに様々な現場からの情報が満載されていると各分野の方々から好評を得ています。

なお、三代目日本青年館の竣工に合わせて「日本青年館特集」を組んで発行した8月号は、記念式典等の参加者や関係機関に配布したほか、全国青年団OB会総会・熊本大会にて配布しました。10月号では「若者特集」を増大号として発行しました。

また、社会教育編集部と関東近郊の社会教育に携わる団体で実行委員会を組織し、11月3日～4日に「社会教育の未来を♥で語る」と題し、首都圏を中心とした社会教育主事等の行政関係者や研究者54名が参加するフォーラムが開催されました。前仙台市長の奥山恵美子氏による基調講演の他、若手主事による企画や雑誌「社会教育」の編集と連動したオープン座談会を行いました。

3月17日には、地域づくりの総合的な力を育てる学びの場として、特別区社会教育主事会の有志や研究者が実行委員会をつくり社会教育に関する全12回の講座の締めくくりとなる、「学びのクリエイターになる！」2017年度成果発表会を開催しました。

「社会教育」の販売促進と日本青年館の広報も目的としながら編集部が共催に加わり、55名（受講者40名 実行委員、協力者、学識等15名）の参加がありました。参加者からは今後の各種事業において日本青年館を使いたいとの声も聞かれました。

<2017(平成29)年度「社会教育」特集テーマ>

- 2017-04 創刊 850号特別企画 (850号)
- 2017-05 (増大号) 次世代育成・支援の体制づくり (851号)
- 2017-06 女性の活躍支援と男女共同参画 (852号)
- 2017-07 音楽の力で地域をつくる (853号)
- 2017-08 日本青年館 社会教育施設・団体としての機能と役割 (854号)
- 2017-09 青少年教育施設と体験活動支援の体制づくり (855号)
- 2017-10 (増大号) 未来をつくる青年・若者 (856号)
- 2017-11 観光と社会教育 (857号)
- 2017-12 大学と地域の協働 (858号)
- 2018-01 人生100年設計構想時代の社会教育戦略(その1) (859号)

2018-02 人生 100 年設計構想時代の社会教育戦略（その 2）（860 号）

2018-03 平成 29 年度の社会教育・生涯学習から 30 年度への展望（861 号）

<平成 29 年度発行部数>

	4 月 号	5 月 号	6 月 号	7 月 号	8 月 号	9 月 号	10 月 号	11 月 号	12 月 号	1 月 号	2 月 号	3 月 号	合計
A 取次	1,485	1,472	1,462	1,468	1,460	1,463	1,461	1,461	1,464	1,462	1,459	1,458	17,575
B 直接	409	403	410	410	414	415	416	413	413	409	409	406	4,927
合計数	1,894	1,875	1,872	1,878	1,874	1,878	1,877	1,874	1,877	1,871	1,868	1,864	22,502
印刷部 数	2,400	2,300	2,300	2,700	3,000	2,300	2,350	2,350	2,350	2,400	2,400	2,400	29,250

普通号 96 p : 税込定価 802 円（本体 743 円） 増大号 144 p : 税込定価 1234 円（本体 1143 円）

4. 図書・資料センター

日本で唯一、戦前・戦後期の地域青年団活動資料を多数所蔵する当館の図書・資料センターは、財団設立 4 年後の 1925（大正 14）年に建物の竣工とともに付設されました。当時は、数少ない一般公開の図書館として市民にも広く活用されていました。近年は、資料センターとしてとりわけ社会教育関係者、研究者、学生、自治体史編さん関係者、メディア関係者等多くの方々に利用され、貴重な資料の保存と資料センターとしての役割を担ってきました。

今年度は移転建設中に倉庫に保管していた図書・資料等を 9 月末までにすべて日本青年館に搬入しました。8 月 1 日のオープンに合わせ、戦前の日本青年館出版物や地方青年団報などの貴重な資料に加え、日青協刊行物や全国青研レポート集等、閲覧機会の多い資料を資料室の可動棚に配架し、その他の資料を資料室の空きスペースや館内の倉庫に搬入しました。

戦前・戦後の貴重な資料の確実な保存を第一とし、その他の蔵書や資料の一定の整理を行いました。戦前の資料は全てそのまま保存し、日本青年館以外でも閲覧ができる戦後の図書など一部の資料については、下記の基準に基づき整理をし、古書業者（東京書房）に引き取りを依頼しました。

〔引き取り依頼図書の基準〕

- 過去の青少年白書や厚生白書、労働白書など官公庁や図書館等の公的機関で所有しているもの
- 他団体の出版物や機関誌など各種団体で所有しているもの
- 1960（昭和 35）年から 2000（平成 11）年までの一般書籍で、青年教育や社会教育と関係のないもの
- 損傷の激しい辞書、辞典など実用的に使用できないもの

配架済み資料の並べ替えと整理に加え、仮置きしている未開封の資料の確認作業と配架を行い、空いたスペースに、収容量を増やすため固定式の棚 8 台を設置しました。すでに資料の閲覧を希望する研究者等には個別に対応を始めていますが、今後は、より活用される図書・資料センターとなるよう、配架作業、目録作成作業と同時に、公開・閲覧をどのような形で行っていくのか、資料センターの在り方も含め検討していきます。

なお、元敦賀短期大学教授の多仁照廣氏より戦前の地方青年団報の全画像データが寄贈されました。今後、有効な活用方法を検討していきます。

また、山形県の青年団 OB 会より、同県の青年団資料の全画像データが寄贈されました。

日本青年館で所蔵している戦前の貴重な映像フィルムの中は、NHKとの契約によりデジタル化され、NHKの番組などで利用されています。今年度に入ってから利用は以下のとおりです。いずれも数秒単位の利用ですが、戦前の様子を表現する貴重な一場面となっており、エンドロールの「協力」の中に「日本青年館」と記載されました。

① 2017(平成29)年8月5日放送

「E T V特集 最後の告白」NHK教育テレビ

〔使用映像〕鋤の光

② 2016(平成28)年8月14日に放送した下記番組のティーチャーライブラリー化等(教育機関への無償貸与)

「NHKスペシャル 村人は満州へ送られた ～“国策”71年目の真実～」

〔使用映像〕鋤の光

5. 文化事業

1) ウィーン・ピアノデュオ・クトロヴァッツ (PDK) の交流公演

全国各地の方々に地元で世界レベルの音楽に触れる機会を提供することを目的に、ヨーロッパを中心とした海外からすぐれたアーティストを招聘し、全国的なコンサートツアーを実施しています。

今年度も世界最高峰のピアノデュオ奏者で、ウィーン国立音楽大学の教授も務めるエドワード&ヨハネス・クトロヴァッツの両名を、9月16日～10月2日(コンサートツアー)の日程で招聘しました。3会場で4公演を実施し、各地で好評を得ることができました。公演地は下記の通りです。



9月18日(月・祝) 開催地：秋田県由利本荘市

会 場：由利本荘市文化交流館 カダーレ 大ホール

主 催：一般財団法人カダーレ文化芸術振興会 [1公演]

9月26日(火) 開催地：山口県長門市

会 場：山口県立劇場 ルネッサながと

主 催：公益財団法人長門市文化振興財団 [1公演]

長門市教育委員会 [1公演] ※中学生対象の教育公演

9月30日(日) 開催地：福島県会津若松市

会 場：会津若松市文化センター

主 催：クトロヴァッツ コンサート実行委員会 [1公演]

6. 高校オーケストラ活動支援事業

日本青年館で第1回目のオーケストラフェスタが開催されたのは1995年1月のことです。日本青年館を活用してのオーケストラ活動を通じた青少年育成の取り組みも24年目を迎えました。

「高校の吹奏楽は全国的な発表・交流の場があるが、オーケストラの場合はそうした場がない。

ぜひそのような場を」という高校の先生方の声を受けてのスタートでした。以来、ティンパニやコントラバスなどの大型楽器の配備・充実に努めるとともに、1998(平成10)年には全日本高等学校オーケストラ連盟(事務局:日本青年館)を組織し、全国的なネットワークづくりにも取り組んできました。現在、連盟には全国100の高校が加盟しています。

今年度は、その連盟と協力して以下の5つの事業に取り組んできました。

1) 第18回全国高等学校オーケストラ・サマークリニックの開催

(8月16日~19日、山中湖畔荘清溪)

全日本高等学校オーケストラ連盟主催、日本青年館後援により開催しました。参加者は全国から28校149名。楽器演奏の基礎的な力を高め、高校生同士の交流をはかり、プロ奏者からの直接指導による技術と音楽性の向上を目標に開催しています。今年度はこれまでより個人レッスンの時間を増やし、経験に合わせた指導を充実させ参加者から高い評価を得ています。

2) 第1回全国高等学校サマー・オーケストラセミナーの開催

(8月16日~19日、山中湖畔荘清溪・ふじさんホール)



上記サマークリニックと並行して、今年度初めて全日本高等学校オーケストラ連盟主催、日本青年館後援により開催しました。参加者は13校39名。交響曲1曲を仕上げるという共通の目標を設定し、音楽をつくりあげるための実践的な指導を通じて、より高い技術と音楽性を身に着けることを目的に実施しました。分奏から始まった4日間のプログラムの最終日には研修の成果として合奏の発表を行いました。より高い技術の習得を目指して申し込んだ参加者が多く、終了後のアンケートでは「向上できた」

との感想や「新たな課題が見つかった」という前向きな回答を得ています。

3) 第24回全国高等学校選抜オーケストラフェスタの開催

(12月26日~29日 日本青年館ホール)

(主催:全日本高等学校オーケストラ連盟、一般財団法人日本青年館)

全国から72校(66演奏団体)、約3,700人の生徒が参加して開催しました。日本青年館の建て替えに伴い、2年間は東京・文京シビックホールで開催してきましたが、今年度から日本青年館に会場を戻し成功裡に終了しました。

各校の演奏の他、41校466名の応募の中から選抜された352人のメンバーによって編成される「選抜合奏」の演奏も披露されました。初めて一緒に演奏するメンバーが集中して音楽をつくり上げる機会は多くの参加者に刺激



を与え、高校オーケストラの模範となる素晴らしい演奏となりました。選抜生徒による演奏曲目と指揮者は下記の通りです。

＜選抜オーケストラ＞

演奏曲目：R. ワグナー作曲／歌劇《タンホイザー》序曲

指揮者：河地良智（洗足学園音楽大学名誉教授 前同大学副学長）

＜選抜弦楽アンサンブル＞

演奏曲目：J. スーク作曲／弦楽セレナードより 第1・4楽章

指揮者：大川内 弘（元日本フィルハーモニー交響楽団コンサートマスター）

4）指揮法初級講座の開催（2018(平成30)年3月18日 日本青年館）

高校生指揮者の技術向上を目的に、全日本高等学校オーケストラ連盟が主催し、日本青年館が後援となって開催しました。2年ぶりの日本青年館開催となった今年は16名の高校生指揮者が参加しました。（指導：河地 良智 ピアノ伴奏：高野 直子）

5）全日本高等学校選抜オーケストラ・オーストリア公演2018の開催

（2018(平成30)年3月26日～4月1日 オーストリア・ウィーン）

（主催：全日本高等学校オーケストラ連盟 後援：一般財団法人日本青年館
旅行取扱：株式会社JTB関東）



全国の音楽を愛する中・高校生を対象に募集して選抜オーケストラを結成し、オーストリアでコンサートと交流会を行うことを通じて、一人ひとりの音楽性の向上と国際性を育てることを目的に毎年春休み期間に実施しており今年度で22回目を迎えました。指揮は昨年に引き続き河地良智先生（洗足学園音楽大学名誉教授・前同大学副学長）にお願いしました。2月17日～18日（東京都立駒場高等学校／国立オリンピック記念青少年総合センター）、3月24日～25日（山中湖畔荘清溪）の2回の練習合宿を経て、3月26日～4月1日の日程でオーストリアを訪問。参加者は昨年の45名から、中学・高校生68名・教員4名・保護者3名・日本青年館2名・撮影班1名、添乗員3名、指揮者1名の総勢82名に増加しました。

今年度はカニスイウス教会での単独公演に加えて、第3回ウィーン国際文化祭に出演。ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の本拠地である楽友協会内のブラームス・ザールで演奏会を行いました、国際音楽祭は2階席まで満席で、演奏後には大きな拍手とブラボーの声をいただきました。また今回はウィーン国立音大教授でザルツブルグ・モーツァルテウム管弦楽団の首席クラリネット奏者であるクリストフ・ツィムパー氏とモーツァルトのクラリネット協奏曲を共演し脈々と続くウィーンの音色を肌で体感しました。その他、名門ウィーン国立音大のクララ・シューマン・ザールでの練習、世界一ともいわれるウィーン・フィルハーモニー管弦楽団のプロの演奏者たちとの交流、国立オペラ座の客席・舞台裏の見学ツアー、多くの作曲家が眠る中央墓地の訪問など、音楽を愛する若者にこれからの人生に残る経験・思い出を与えることに重点をおいたプログラムを組みました。

(1) コンサート概要

①3月28日教会単独コンサート（会場：ウィーン・カニスイウス教会）

曲目：ブラームス／大学祝典序曲、成田為三／浜辺の歌、芥川也寸志／《弦楽のためのトリプティーク》より第1楽章、W. A. モーツァルト／クラリネット協奏曲より第1楽章（独奏：クリストフ・ツィムパー）、ワーグナー／楽劇《ニュルンベルクのマイスタージンガー》第1幕への前奏曲、滝廉太郎／荒城の月

②3月29日第3回ウィーン国際音楽祭（会場：楽友協会ブラームスザール）

曲目：ブラームス／大学祝典序曲、成田為三／浜辺の歌、芥川也寸志／《弦楽のためのトリプティーク》より第1楽章、W. A. モーツァルト／クラリネット協奏曲より第1楽章（独奏：クリストフ・ツィムパー）、チャイコフスキー／バレエ音楽《眠りの森の美女》より「ワルツ」、ドリーブ／バレエ音楽《コッペリア》より「ワルツ」、J. シュトラウスⅡ／皇帝円舞曲、ワーグナー／楽劇《ニュルンベルクのマイスタージンガー》第1幕への前奏曲、滝廉太郎／荒城の月、J. シュトラウスⅡ、ポルカ《雷鳴と稲妻》

(2) 参加生徒（全国22校から68名が参加）

《栃木県》宇都宮女子 《群馬県》群馬中央 《埼玉県》浦和西 《千葉県》稲毛、津田沼、船橋 《東京都》ICU、早稲田実業 《神奈川県》神奈川総合、捜真女学校、清泉女学院、日本女子大附 《長野県》上田、須坂、長野 《静岡県》浜松開誠館 《京都府》京都女子、ノートルダム、洛北 《大阪府》帝塚山学院 《広島県》山陽女学園 《福岡県》育徳館

7. 第22回清溪セミナー（11月16日～17日 日本青年館）

地方自治体の若手政治家の研修・交流の場として実施してきました本セミナーは、若手の地方政治家の研修の場をつくろうとの声を受け、青年団出身の若手政治家の手によって1997(平成9)年2月に第1回目が開催されました。

この清溪セミナーには大きな特色が三つあります。一つは、各ブロックから選出された実行委員による自主的な運営であること。二つ目は、参加者の声を活かし時宜を得たテーマを設定し、専門の講師をお招きしていること、そしてその講師の先生方の地方政治家を育てたいという情熱的な姿勢が共感を呼び合っていること。三つ目は、超党派であること、が上げられます。

今年度は「高齢者と地域活性化」をテーマに、2年ぶりに日本青年館で開催し、26都府県から77名が参加しました。プログラム及び講師は下記の通りです。

<概要>

講座Ⅰ「地域包括ケアシステムを内包したコンパクトなまちづくり」

講師：菅原 英次 氏（岡山県高梁市川上診療所所長）

講座Ⅱ「買い物困難者対策と地域活性化への道筋」

講師：折笠 俊輔 氏

（公益財団法人流通経済研究所主任研究員、農業・地域振興研究開発室室長）

講座Ⅲ「高齢者ドライバーの運転免許返納を提案する」

講師：福岡 政行 氏（東北福祉大学特任教授）

講座Ⅳ「世界経済の潮流～日本経済の行方～」

講師：浜 矩子 氏（同志社大学ビジネス研究科教授）

8. 第73回田澤義鋪記念会（11月1日 明治神宮）

田澤義鋪の残した民主的平和的な社会教育上の精神と業績を伝え、これの実現に努めることを目的に、毎年、田澤義鋪記念会を開催しています。

（1）第73回総会の開催（11月1～2日 明治神宮および日本青年館）

昨年度に引き続き、初代青年館建設のきっかけとなった明治神宮造営とそれを担当した田澤義鋪に思いをはせながら、大九報光会及び全国青年会館協議会理事長会とともに明治神宮秋の大祭にあわせて開催しました。初日は大祭参列のほか、関係企業や団体、元職員等を招いての日本青年館新館お披露目パーティーに参加。2日目には第73回総会を開催したのち、明るい選挙推進協会の金井壯太調査広報部主幹を講師に招き「田澤義輔と明るい選挙推進運動について」と題し講演をいただきました。

（2）田澤会通信第183号の発行

3月26日付で田澤会通信183号を発行しました。三代目日本青年館の現状や11月の記念会の報告に加え、今年度実践大賞で田澤賞を受賞した高知県青年団協議会の取り組みや、田澤記念館が発行したイラストを活用した出版物「郷土の光 田澤義鋪」などを紹介しました。

9. 国際交流活動

1) 中日青年交流センターとの交流

中日青年交流センターは、1984年、当時の中曽根康弘内閣総理大臣と中国の胡耀邦総書記との共同発意によるもので、日中友好21世紀委員会が、その建設をそれぞれの政府に提唱し、日本政府の無償資金協力と中国政府の資金により1991年共同プロジェクトで建設された施設です。以来、日本青年館は施設の運営等について支援するため、中日青年交流センターから研修生を受け入れるなど施設間の交流を続けてきました。今年度の交流は以下の通りです。

（1）2017（平成29）年度中日青年交流センター訪日団の受け入れ（7月30日～8月3日）

今年度は日本青年館竣工記念式典にあわせて、訪日団を招聘しました。訪日団日程と訪日団メンバーは下記のとおりです。

〈訪日日程〉

- 7月30日 羽田空港から入国。山中湖畔荘清溪にて歓迎会。
- 7月31日 富士山観光後、東京へ移動。（公社）日本中国友好協会訪問、懇談。
- 8月1日 TOTO新宿ショールーム視察。小里泰弘衆議院議員表敬訪問。
日本青年館竣工記念式典出席。祝賀会で紹介、懇談。
- 8月2日 全国青年会館協議会総会に出席、挨拶。テピア見学。
日本システムデザイン（株）を表敬、懇談。
- 8月3日 羽田空港より帰国。

〈訪日団員名簿〉

- 団 長 馬 興民 中日青年交流センター主任
- 秘書長 陸 鉄鈞 中国国際青年交流センター経済合作部部長
- 団 員 李 傑 中国国際青年交流センター社団活動部部長

団員	董 驥	河北省青年連合会副秘書長
団員	彭 莉	山東省青年連合会副秘書長
団員	雷 霖	太鋼鉦業公司労働組合主席
団員	戴 雨薇	豊盛科学技術集団有限公司副総経理
団員	呉 彦娶	重慶派森百オレンジジュース有限公司総経理
団員	呉 晋宇	山西元工電力工程設計有限公司董事長
団員	何 好	重慶南涪アルミニウム精密製造有限公司総経理
団員	孟 凡佳	楽陵市孟氏漁業科学技術有限公司副総経理
団員	崔 斌	中国国際青年交流センター公益合作部副科長

(2) 2017(平成29)年度日本青年館訪中団の派遣

(1月14日～19日 北京・山東省泰安市・青島市)

中日青年交流センターからの招待を受けて日本青年館と全国青年会館協議会共催、全国青年団OB会協力による訪中団12名を派遣しました。訪問先は北京市並びに山東省泰安市と青島市。青島市は初めての訪問都市でした。

今回の特徴は、新しくセンター党委書記に就任した陳宗氏による党委書記主催の歓迎宴と馬興民主任主催の歓送会と、センターのツートップがお迎えしてくれたことであり、両氏ともに日本との交流に強い意欲がうかがえたことにありました。

また、中国国内ではスマホでの決済などキャッシュレス経済が進んでいることやレンタサイクルサービスの普及など改めて発展のスピードの速さに驚かされました。

日程並びに団員は以下の通りです。

〈訪中日程〉

- 1月13日 日本青年館にて結団式
- 1月14日 羽田国際空港より北京国際空港。センター党委書記主催の歓迎会。
- 1月15日 北京南駅より高速鉄道にて泰安駅。泰山登山～影絵芝居体験。
- 1月16日 泰安駅より高速鉄道にて青島北駅。ハイアール社見学。
青島市青年連合会主催歓迎会。
- 1月17日 ろう山見学。市企画館視察～市創客大街視察。
- 1月18日 青島ビール博物館見学。青島空港より北京空港。
センター主任主催歓送会。
- 1月19日 北京国際空港より羽田国際空港へ帰国。空港にて解散。

〈訪中団員名簿〉

1. 団 長 山本 信也 (一財)日本青年館常務理事
2. 顧 問 佐々木計三 (株)ニッセイ代表取締役社長
3. 秘書長 江口 芳人 (一財)日本青年館総務課長
4. 団 員 國廣 京子 (一財)北海道青年会館常務理事
5. 団 員 渡辺 政巳 (一財)宮城県青年会館副理事長
6. 団 員 金子 利昭 (株)ニッセイ日本青年館ホール支配人
7. 団 員 岩永友佳子 (一財)滋賀県青年会館維持会員
8. 団 員 中西 宏一 (一財)滋賀県青年会館維持会員

- 9. 団 員 中西 朋子 (一財)滋賀県青年会館維持会員
- 10. 団 員 西沖 和己 (一財)日本青年館評議員・元日青協会長
- 11. 団 員 西沖由美子 (一財)日本青年館維持会員
- 12. 団 員 吉田 豊 (一財)日本青年館業務部長

2) 大韓民国・釜山ユースホステルアルピナホテル幹部の訪日受入れ

日本青年館と大韓民国・釜山ユースホステルアルピナホテルとの合意書に基づき、キム・グワンソク営業チーム長を9月14日から16日までの3日間受け入れました。14日に歓迎夕食会を催した後、翌日福岡県に移動し、日青協元副会長の森内雅文(公財)日本ラグビーフットボール協会普及・競技力向上委員会アドバイザーのお世話により福岡県ラグビーワールドカップ2019福岡開催推進委員会事務局を訪問し、青少年によるタグラグビー交流について意見交換をしました。翌日は福岡県ラグビーフットボール協会を表敬し、九州電力社員OBによる釜山とのラグビー交流を通じたタグラグビー普及について意見交換を行いました。

<アルピナホテルの概要>

ホテルは2004年に釜山市により建設されたユースホステルであり、客室数103室、宿泊人員469名、セミナー・宴会場8室のほかフィットネスクラブ、ゴルフ練習場、プール、サウナ、レストラン、インターネットカフェ、スカイラウンジの設備を有している。職員数は120名で総務、ホテル、宴会場、文化・スポーツ部と施設管理部門がある。

10. 関連事業

1) 全国青年会館協議会活動

各県における青年団運動の拠点としての役割を担う青年会館の建設は、昭和25年2月の佐賀県青年会館がスタートでした。その後、各地に青年会館の建設運動が起こり、現在20の都道県に青年団の手による青年会館が建設されています。それらの青年会館同士の連絡協調と青年団体の振興、地域社会の発展を図ることを目的として、全国青年会館協議会が組織され活動しています。

主な活動内容は、財団運営に関わる研修、青年団をはじめとする青少年団体への支援、施設運営のノウハウの相互交換など多岐にわたっています。また、中日青年交流センターとの交流など、国際交流も行い施設の運営等に役立てています。今年度は以下の活動を展開してまいりました。

(1) 総会(8月1日～2日 日本青年館)

全国青年会館協議会総会を8月1日、2日に日本青年館で開催しました。初日は日本青年館新館竣工記念式典及び祝賀会に出席し、翌日総会を開催しました。総会には17館から35名の出席があり、昨年度の事業報告・決算及び今年度の事業計画・予算を承認・決定しました。また、総会の冒頭には、中日青年交流センター訪日代表団の皆様をご紹介し、馬興民(中日青年交流センター主任)団長よりご挨拶いただきました。総会終了後には、日青協が開催した、「アジア未来サミット」へ参加しました。また、翌年の総会は本年に引き続き、日本青年館にて開催することを決定しています。

(2) 理事長会・役職員研修会(11月1日～2日 日本青年館)

11月1日の明治神宮秋の大祭及び、日本青年館新館お披露目パーティーへ参加したのち、2日の午前中に全国青年会館協議会理事長会・役職員研修会を開催しました。出席は14館から19名で、各会館の上半期の概況を報告頂いたのち、沖縄県青年会館の民泊事業への取り組み、栃木県青年会館の指定管理制度の取り組み、鹿児島県青年会館の各種助成事業を活用した公益事業の取り組みについて報告いただきました。その後、上野での美術館見学を経て昼食の後散会しています。

(3) 理事会 (2月6日 日本青年館)

2017年度決算見込み、2018年度事業計画と予算について審議するため理事会を開催しました。2018年度総会は日本青年館において6月5日(火)に開催する予定です。

(4) 加盟青年会館一覧 (2018年3月31日現在)

一般財団法人北海道青年会館	〒060-0806	札幌市北区北六条西 6-3-1	TEL011-726-4235
一般財団法人岩手県青少年会館	〒020-0196	盛岡市みたけ 3-38-20	TEL019-641-4550
一般財団法人宮城県青年会館	〒983-0836	仙台市宮城野区幸町 4-5-1	TEL022-293-4631
一般財団法人秋田県青年会館	〒011-0905	秋田市寺内神屋敷 3-1	TEL018-880-2303
福島県青年会館	〒960-8103	福島市舟場町 3-26	TEL024-523-1484
茨城県立青少年会館	〒310-0034	水戸市緑町 1-1-18	TEL029-226-1388
(公益社団法人茨城県青少年育成協会)			
一般財団法人栃木県青年会館	〒320-0066	宇都宮市駒生 1-1-6	TEL028-624-1417
群馬県青少年会館	〒371-0044	前橋市荒牧町 2-12	TEL027-234-1131
(公益財団法人群馬県青少年育成事業団)			
一般財団法人福井県青年会館	〒910-0005	福井市大手 3-11-17	TEL0776-22-5625
一般財団法人静岡県青少年会館	〒420-0068	静岡市葵区田町 1-70-1	TEL054-255-2566
一般財団法人愛知県青年会館	〒460-0008	名古屋市中区栄 1-18-8	TEL052-221-6001
一般財団法人滋賀県青年会館	〒520-0851	大津市唐橋町23-3	TEL077-537-2753
一般財団法人島根青年館	〒690-0033	松江市大庭町 1751-13	TEL0852-21-2818
一般財団法人岡山県青年館	〒700-0081	岡山市北区津島東 1-4-1	TEL086-254-7722
一般財団法人防長青年館	〒753-0064	山口市神田町 1-80	TEL083-923-6088
特定非営利活動法人高知県青年会館	〒781-2122	吾川郡いの町天王北 1-14	TEL088-891-5300
一般財団法人佐賀県青年会館	〒849-0923	佐賀市日の出 1-21-50	TEL0952-31-2328
一般財団法人熊本県青年会館	〒862-0950	熊本市水前寺 3-17-15	TEL096-381-6221
一般財団法人鹿児島県青年会館	〒890-0005	鹿児島市下伊敷 1-52-3	TEL099-218-1225
一般財団法人沖縄県青年会館	〒900-0033	那覇市久米 2-15-23	TEL098-864-1780

(事務局)

一般財団法人日本青年館 〒160-0013 新宿区霞ヶ丘町4-1 TEL03-6452-9015

2) 2017(平成29)年度全国青年団OB会 第36回総会・熊本大会の開催

(10月9日～10日 ホテル日航熊本)

全国29都道府県から98名、熊本県内から150名総勢248名のOB・OGの参加を得て開催しました。開会式では宮尾県教育長から歓迎の挨拶、交流会には蒲島郁夫県知事から祝辞、大西一史熊本市長から乾杯の音頭を取っていただきました。蒲島知事は20才前後の2年間を地域青年団員として活動されており、その頃の体験が今に大いに役立っているお話をされ、交流会最後までご在席いただけました。

今年の総会では役員改選にあたり、これまでの役員任期を4年から2年に改正し、新しい会長には柳本嘉昭さん(山梨県)、幹事長には小野寺喜一郎さん(山形県)を選任しました。

翌日は水前寺公園、復興中の熊本城を視察し、お別れ昼食会で次期開催地福井での再会を約束して散会しています。

今後の総会予定は以下の通りです。

①第37回総会・福井大会 2018(平成30)年10月21日(日)～22日(月) あわら温泉

3) 大九報光会(11月1日 明治神宮)

明治神宮造営に際し、全国の青年団が労力奉仕にあたり、そのことがきっかけとなって日本青年館は誕生しました。その造営の労力奉仕に参加された方々が1950年(昭和25年)11月1日、明治神宮御鎮座30年祭に参加された折、そのことを記念して大九報光会を結成しました。「大九」とは、明治神宮御鎮座の年、大正九年に由来し、さらに耐乏生活に耐え、光明と希望に生きる耐久生活にもかけて命名されたものです。以来、ほぼ毎年11月1日に労力奉仕に参加された方の二世、三世の方々等により明治神宮において総会が開催されています。

今年度も田澤義鋪記念会並びに全国青年会館協議会と合同にて開催し、総会には11名の参加がありました。その内2グループが親・子・孫の3世代での参加となり、世代を超えて造営奉仕の精神が継承されていることがうかがえました。総会終了後は、会館協議会理事長会・役職員研修会の参加者及び田澤記念会の参加者とともに、明治神宮・秋の大祭に参列しています。

4) 清溪フォーラム行政懇談会(8月1日～2日 日本青年館)

青年団出身の首長で組織している清溪フォーラムの今年度の行政懇談会は、新装した三代目日本青年館で竣工記念式典にあわせて開催しました。出席会員は伊藤大崎市長、大西長門市長、若生富谷市長、保坂甲斐市長の4名と日本青年館から江口総務課長、ご来賓として澤崎前魚津市長、塩田前南陽市長をお招きしました。当日は日本青年館新館竣工記念式典及び記念祝賀会に列席した後、日本青年館15階外苑サロンにて夕食を兼ねて意見交換を行っています。

会員は以下の通り(敬称略)

会 長	伊藤	康志	(宮城県大崎市長)
幹 事 長	大西	倉雄	(山口県長門市長)
幹 事	若生	裕俊	(宮城県富谷市長)
	金森	勝雄	(富山県舟橋村長)
監 事	保坂	武	(山梨県甲斐市長)

5) 国立青少年教育振興機構「福島こども未来塾」への協力について

(8月21日 日本青年館)

被災地福島の子どもたちに様々な体験の機会を提供する目的で、独立行政法人国立青少年教育振興機構が主催する「福島こども未来塾」に参加している小中学生44名、大学生ボランティア12名を受け入れました。8F会議室にて日本青年館プロモーションビデオと国立競技場建て替えプロモーションビデオを視聴したのち、最上階の外苑サロンから建設中の国立競技場や外苑地区の諸施設を展望し、日本青年館を含めた外苑地区と東京オリンピック・パラリンピックとの関りを学びました。

1 1. 後援・協力事業

今年度、日本青年館が依頼を受けて後援・協力をした事業は下記のとおりです。

① 版画フォーラム2017年和紙の里ひがしちちぶ展 2017(平成29)年6月17～24日

〈主催者〉 版画フォーラム実行委員会

後援名義使用、日本青年館賞提供

② 第43回太陽美術展 2017(平成29)年11月17日～11月24日

〈主催者〉 太陽美術協会

後援名義使用、日本青年館賞提供

③ 日中女性フォーラム 2017(平成29)年11月4日

〈主催者〉 公益社団法人日本中国友好協会

後援名義使用